

日本科学哲学会 第 51 回大会

シンポジウム「行動に還る—感情・表情・身体動作」

2018 年 10 月 13 日 於：立命館大学衣笠キャンパス

感情と哲学の始まり

河野 哲也（立教大学）

1、問題

- ・ 諸感情（エモーション）はどのようにカテゴライズされるか。
- ・ 感情を他の心理的状态や機能との関係で、どのようにカテゴライズするか。
- ・ 感情を行動の局面としてエコロジカルに、かつ、ダイナミックに捉える。
- ・ 拙著『暴走する脳科学』（2008）への面白い反応：心理的カテゴリーが社会的に構築されているという考えを激しく嫌う人がいる。心理的カテゴリーは、膵臓や肝臓のように機能があらかじめ決定されていると考える生理学者がかなりいる。

2、心理的カテゴリーの文化依存性

I.A. リチャーズ Richards 「西洋の心理学は自分自身の基本的仮定をあまりにも検討・批判してこなかった」（*Mencius on the Mind* 1932: 81）

私たちはそれらの区別が、あたかも無条件にものごとの本質に属しているかのように考え、その区別を採用している。これらの区別が人為的に作られたもので、思考の伝統の一部をなすものとして維持されていることは忘れられている。

（Richards, 1932:3-4）

3、感情の心理学理論

4、現代哲学の感情の特徴付け

5、感情の分類の問題

- ・ 心理学における感情分類の多様性と多義性

- ・感情の階層的クラスター
- ・近代哲学での分類：デカルト、スピノザ

6、人工種としての心理学的カテゴリー

- ・動機付けと感情は別のものか
- ・心理学カテゴリーの社会的構成
- ・心的機能の分類
- ・心理学的カテゴリーをどう理解するか

7、感情と哲学の始まり

- ・デカルト「情念」の数と順序
- ・驚き（admiration）：「精神が受ける突然の不意打ち」
- ・情念の効用と害
- ・感情と思考、哲学

8、結論

- ・感情とは、ある状況に落とし込まれた者が、規定の価値判断によって反応（リアクション）する“過程”である。
- ・そのリアクションが何に対するリアクションであるかは、むしろ、あとの対象に関する認識と判断によって変更しうる。
- ・思考とは、受け身の状況を脱して、洗濯可能性を増やす試みである。それは自由への希求である。
- ・哲学は、自己束縛を解いて自由になる試みである。
- ・感情を、精神的に再現しようとする態度は、ある状況に身を置き続け、その最初の驚愕の状態を維持しようとする活動である。人はこれを「情念」という。